

むかし、あるところに、古いお寺があつて、和尚さんと小僧さんが住んでいました。

和尚さんは、けちんぼうで、法事でもらったおもちをしまつておいて、小僧さんにはひとつも食べさせてくれませんでした。

夜、ご飯がすむと、和尚さんは、いつも、小僧さんに、

「小僧、小僧。早く寝ろ」といって、先に寝かせました。そして、戸だから、こっそり、おもちを出して来て、いろいろであぶりました。

おもちが、いいぐあいに焼けて、ぶうつとふくらんでくると、和尚さんは、

「あちち」といいながら、手でおもちを返して、ぶうぶうふきます。「あちち」「ぶうぶう。」「あちち」ぶうぶう。それからひとりでいただきます。

ある晩のこと、小僧さんが寝ていると、となりの部屋から、なんだか、「あちち、ぶうぶう」と、聞こえて来ました。小僧さんは、なんだろうと思つて、そうつと戸を開けてのぞいてみました。すると、和尚さんが、おいしそうにおもちを食べていました。小僧さんは、

（和尚さまが、ひとりでおもちを食べているぞ。あのおもち、おれも食べたいなあ）と思つて、ちよつと考えました。

朝になると、小僧さんは、和尚さんの前にきちんとすわつて、

「和尚さま、和尚さま。お願いがあります」といいました。

「なんだ。いうてみる」

「わたしの名前を変えてください」

「なんという名前に変えるんだ」

「あちちぶうぶうつて名前に変えてください」

「そんな名前、聞いたことがないぞ」

「いや、和尚さま、これはとってもいい名前だつて、本に書いてありました」

和尚さんは、

「そうか。そんなにいい名前なら、そうすればいい」といいました。

その晩、小僧さんがふとんに入つてから、和尚さんは、いつものように、おもちをいろいろであぶつて、「あちち」といいながら、ぶうぶうふきました。すると、小僧さんが、「はい」といつて、となりの部屋から出て来ました。和尚さんは、びっくりして、

「なんだ、なんだ」といいました。小僧さんは、

「和尚さまが、今、あちちぶうぶうつて呼んだので、起きて来ました。なんのご用ですか」といいました。

和尚さんは、しかたがないので、

「もちが焼けたぞ。おまえも食べる」といいましたとぞ。

おしまい

原話…『梁川町史』

再話…村上郁